阿波国文庫旧蔵・徳島県立図書館蔵『拾遺集私抄』翻刻補遺

堤　和博

はじめに

徳島県立図書館蔵『拾遺集私抄』は、不忍文庫旧蔵・阿波国文庫旧蔵で、上下二冊の写本にして、天下の孤本である（以下、『拾遺集私抄』を指して「本書」、徳島県立図書館蔵本を指して「阿波本」という）。阿波本によると、『拾遺和歌集』から三六五首の短歌・二首の旋頭歌・一首の短連歌を抄出し、加えて四首の長歌から一項目ずつ、詞書・作者名から八十九項目を取り出して注を加えた本書は、阿波本が孤本であることと他に言及した資料が見い出せないことが大きく、編者・成立時期・伝来過程等につき、確かなことは分かっていない。

こういう状況ではあるが、佐藤高明氏による精力的かつ詳細な研究[1]があり、本書に対する研究の礎は既に築かれている。が、佐藤氏以降本格的な研究が全く見受けられないのは残念である。本書は、内容のユニーク[2]さをはじめ、色々と注目すべき点を多く持っているのである。

例えば、阿波本巻十六は「雑春」に加えて「雑夏」の部立てを持ち、巻十七は「雑秋」に加えて「雑冬」の部立てを持つが、「雑夏」「雑秋」の部立てを持つ『拾遺和歌集』写本類は他にないと佐藤氏は言う。そしてこれらの部立ては、阿波本の親本から既にあったものだろうと類推する。一方で佐藤氏は、阿波本の和歌本文を精査し、「定家本系の流れを汲む一本」が基であると言う。このような阿波本の特徴からしても、本書に対する関心がもっと高まって然るべきだと思うのである。

そこで、佐藤氏の研究を発展させていきたいのであるが、まずは阿波本の全文の翻読から始めなければならない。[3]その全文翻刻も佐藤氏によって既になされている。[4]また、徳島県立図書館は、阿波本の全帖の白黒写真をウェブページ上で公開していて、[5]阿波本の全容は一応確かめられる。しかし佐藤氏の翻刻（以下、「佐藤翻刻」という）について言えば、凡例で「忠実に翻刻した」と言うものの、必ずしも阿波本に忠実でない面も見受けられる。また、写真で見るにしても、阿波本には朱の書き込みがあるし、その他にもウェブページ上の白黒写真では見えにくい箇所も若干ある。[6]佐藤氏は見せ消

ち・補入記号・傍記等の書き込みも含めて微細に和歌本文を観察することで「定家本の流れを汲む」という結論に至っていることでもあり、佐藤翻刻の正確ではないと思われる所に写真では分かりにくい所やその他注意を要すると思われる所を併せて提示することにしたのが、本翻刻補遺である。当然だが、写真と併せ見られたい。

凡例

位置　指摘した箇所が、徳島県立図書館のウェブページの写真のどこに位置するのかを、★印の下に左の例に従って提示する。

★上巻3／左6行目／29番歌注　①②③④⑤⑥

①　上巻か下巻かを示す。

②　上巻・下巻の何枚目の写真であるかを示す。即ち、写真の各頁の上に、上巻なら1／55～55／55、下巻なら1／59～59／59と掲示されている、斜線の前の数字である。

③　各写真の右側（各帖の裏）か左側（各帖の表）かを示す。

④　右側乃至左側の始めから数えて何行目かを示す。ただし、空白行は数えない

⑤　『新編国歌大観』番号によって、何番歌（詞書・作者名に対する注も含む）であるかを示す。なお、佐藤翻刻に付された歌番号も、『新編国歌大観』番号と一致する。

⑥　指摘する箇所が歌本文である場合は「歌」、詞書本文である場合は「詞書」、作者名である場合は「作者名」、それぞれに対する注である場合は「歌注」「詞書注」「作者名注」とする。

訂正結果　☆印の下に示したのが佐藤翻刻に私に訂正を加えた結果、乃至、阿波本を見て問題と思われる点の指摘である。問題の文字は倍角・傍線で示した。

指摘　二字下げ部分に、原則倍角・傍線で示した文字に関し、佐藤翻刻の問題点や写真では見えにくい所などを指摘した。なお、「■」⇧「◇」のようにある場合は、佐藤翻刻では「◇」となっているのを、「■」に訂正したことを示す。〔　〕内には私見を示した。

次に、佐藤翻刻の凡例の一部を掲げ（鉤括弧内）、本翻刻補遺を見るにあたって注意していただきたい点（二字下げ部分）を挙げておく。佐藤翻刻の凡例は、阿波本『拾遺集私抄』のみならず、注（4）に挙げた五作品の翻刻すべてに対する

ものであるが、次に引用した部分は『拾遺集私抄』には適用されておらず、それを本翻刻補遺でどう扱ったかを示しておいたものである。

「原典における漢字は一部を除き原典通りの字体とし、あえて常用漢字字体に統一したりはしなかった。例えば、原典のある個所に「聲」「枩」「邊」とあり、別な個所で「声」「松」「辺」とあればその通りとし、これをあえて「聲」「枩」「邊」に、また「声」「松」「辺」などの字体に統一したりすることは避けた。」

佐藤翻刻では、例えば、★上巻44／右3行目　552番詞書「一　一條攝政藏人頭にて」の「攝」は阿波本通りに翻刻するが、「條」は「条」に改めて翻刻している（三〇頁5行目）。このように、阿波本通りの字体である所とそうでない所がある。旧字体については、この「攝」のように阿波本通りであるのはむしろ例外的で、概ね常用漢字体に改めて翻刻されている（例えば「歸」を「帰」と翻刻する等）。また、異体字を見ても、次に掲げたものなどは、すべて乃至はほとんどが常用漢字体乃至は通用の字体（括弧内の字）に翻刻されている。これら漢字の字体については、煩雑を避けるため一々指摘しなかった。

第（第）　迄（迄）　渕（淵）　奥（魚）　鶴（鶴）
墅（野）　條（条）　斗（許）　枩（松）　枚（杉）
哥（歌）　船（船）

「翻刻文には濁点は附さなかった」

佐藤翻刻では、阿波本にはなく私意に付されたと思われる濁点が多数ある。阿波本は原則的に濁点を付さない方針で書写されたと思われるが、主として朱による濁点が所々に見られる（後筆か）ので、佐藤翻刻の私意による濁点と区別するため、[7] 阿波本に濁点がある場合は一々それを示しておいた。即ち、濁点であることを示していない場合は、佐藤翻刻の私意による濁点である。一方、傍記にも一部濁点があるが、傍記については、佐藤翻刻の私意による濁点も、「濁点無し」と訂正しておいた。

「原典には書写者または校訂者の附したと思われる句読点にかわる朱点が附されているので、本書の句読点も大体それに従うこととした」

阿波本『拾遺集私抄』にはここに言うような朱点はない。佐藤翻刻にある句読点は、すべて私意によって付されたと思われる。

「原典の本文にある傍注形式による朱の書き込みについては、本書においては（朱）として翻刻した。」

ある文字の左に見せ消ち、右に傍記（訂正文字）があって、両方が朱であっても、佐藤翻刻では、右の傍記に

のみ「(朱)」と記されている場合が多い。こういう場合、見せ消ちも朱であることは、一々指摘しなかった。

また、★下巻31／右7行目の見せ消ちと傍記を最後として、書き込みは濁点も含めて朱ではなくなる。以下の書き込みはすべて墨による。[8] しかし、佐藤翻刻では最後まで「(朱)」と記されているので注意を要するが、一々指摘しなかった。

翻刻補遺

★上巻3／左8行目／29番歌注
☆うしろめたきは心ろもとなきなり
　左に見せ消ち（朱）〔直上の「ろ」に付けるのを誤ったか〕

★上巻6／左1行目／63番詞書
☆きたの宮のもゝさの屏風
　一文字ごとに左に見せ消ち（朱）、「ゝ」の右に「ぎ」（朱、濁点有り）

★上巻8／右5行目／91番歌注
☆しらせたるやうなると也
　左に見せ消ち（朱）、右に「け」（朱）

★上巻9／右4行目／119番歌注
☆我宿はかりになくほとに
　左に見せ消ち（朱）、右に「ば」（朱、濁点有り）

★上巻9／右6行目／120番作者名
☆一　人伴坂上郎女
　左に見せ消ち（朱）、右に「大」（朱）

★上巻9／右7行目／120番作者名注
☆人ともさかのへのをとめと讀なり
　左に見せ消ち（朱）、右に「大」（朱）

★上巻9／左5行目／129番歌
☆行末は又
　左に見せ消ち（朱）、右に「まだ」（朱、濁点有り）

★上巻9／左7行目／129番歌注
☆たちかたらふてかうして
　左に見せ消ち（朱）

★上巻9／左8行目／132番歌
☆いつこにもさきはすくめと我宿の
　左に見せ消ち（朱）、右に「ら」（朱）

★上巻10／右5行目／134番歌注
☆さはへをいたき蠅あらふる神は物忌神なり
「た」は「さ」（左）か
「惣」（読み仮名無し）⇧「惣（すべ）」

★上巻10／右から左にかけて／巻二巻末から巻三巻頭
一行分空白無し

★上巻10／左4行目／145番歌
☆天河こその渡りの移ろへはあさせにふむまに夜そ
字に重ねて抹消記号（朱）

★上巻10／左6行目／145番歌注
☆ほとにとこかあさきせと思て
「と」⇧「そ」

★上巻11／左7行目／163番歌注
☆かりそめにとてこふする
「する」⇧「る我」

★上巻11／左8行目／163番歌注
☆花を見は日かくれてはかなふ
濁点朱

★上巻12／左8行目／176番歌
☆□□いつこにか今宵の月のみえさらん
冒頭二字空き〔11行目が「一　経臣　つねをん」となっていて、一行で175番歌の作者名とその読みを記して注の行を持たないので、12行目はその注の行であると誤ったか〕

★上巻13／右7行目／178番歌注
☆松虫のこゑもかひなし宿なから
たつねは草の露の山陰（小字二行書き）

★上巻13／左4行目／192番歌注
☆そむく物からはな薄
右に比較的短い線（墨）と比較的長い線（墨の上に朱）

★上巻14／右5行目／207番歌注
☆をとをはかなしき物に
左に見せ消ち（朱）

★上巻16／左8行目／251番歌注
☆眞實の志と
左に「志」（朱、上の線も朱）、右に「コヽロサシ」（墨）

★上巻18／右5行目／273番歌注

☆ときはかきはじやうぢうの心也
「じ」「ぢ」ともに濁点は朱

★上巻19／右3行目／287番歌
☆春をすくすともいつかは花の色にあくへし
字に重ねて抹消記号（朱）、右ではなく左に「き」（朱）

★上巻19／右7から8行目にかけて　巻五巻末から巻六巻頭
一行分空白無し

★上巻20／右1行目／316番歌注
☆ためもとはかたより別をおしむ
左に見せ消ち（朱）、右に「か」（朱）

★上巻20／左1行目／325番歌注
☆かなしきと云る也おしのお
左に見せ消ち（朱）、右に「を」（朱）

★上巻22／右3行目／354番歌注
☆こうはし子をは也
左に見せ消ち（朱）

★上巻22／左8行目／368番歌
☆山川はきのは流れず浅き瀬をせけは渕とそ
濁点朱（汚れにも見える）

★上巻23／左5行目／374番詞書注
☆あるをすはうたけといふなり
左に見せ消ち（朱）、右に「こ」（朱、濁点無し）

★上巻24／左7行目／390番歌
☆いかりゐのいしをくゝみてかみにしは
左に見せ消ち（朱）、右に「来」

★上巻25／右5行目／395番歌注
☆池をはりは池をはび
濁点朱

★上巻25／左2行目／399番歌注
☆まし也つゝらをこにや
踊り字に重ねて抹消記号、右に「ヅ」（朱、濁点有り）

★上巻25／左5行目／400番作者注
☆すけゆき高をか氏なり
右に五文字有り（判読不能）

★上巻26／左6行目／408番歌
☆あしきぬはさけからみてそ人はきるひろやたらぬと思

左に見せ消ち無し、右にえ（朱）

★上巻27／右2行目／409番歌
☆ほしのあゆくそみへつるは螢の空に飛そ有けり
「そ」の左に見せ消ち無し、右に「と」（朱）
「り」の左に「る」（朱）

★上巻27／右5行目／410番歌注
☆をしあゆかすなはねすみとり
一文字ごとに左に見せ消ち（朱）、右に長い鍵形記号（朱）

★上巻27／左8行目／419番歌
☆別れていかんむなくる
左に見せけち（朱）

★上巻28／左3行目／425番歌注
☆水のそこに鵜の鳥のいたり
左に見せ消ち（朱）

★上巻28／左4行目／425番歌注
☆たるり也
左に見せ消ち（朱）

★上巻29／右6行目／431番歌
☆秋風のよもの山よりをのかじたふくにちりぬる
濁点朱

★上巻29／左1から2行目にかけて／巻七巻末から巻八巻頭
一行分空白無し

★上巻30／左3行目／443番歌
☆つもりつゝいとくし深くは身を沈むらん
左に見せ消ち（朱）、右に「ど」（朱、濁点有り）

★上巻30／左4行目／443番歌注
☆ゞりもくの時官位なとの
濁点朱

★上巻33／左7行目／480番歌注
☆水かしみてをもしなりて沈めとも
左に見せ消ち無し、右に「く」（朱）

★上巻34／右6行目／482番詞書
☆つくれる楊貴
「楊」⇧「揚」

★上巻34／右8行目／482番歌

☆はねもならへで なにしかも
　濁点朱

★上巻34／左4行目／483番歌
☆さゞなみやあふみの宮はなのみして
　濁点朱

★上巻35／左1～2行目／487番歌注
☆方士とは幼術なり夢幼と云は
　二箇所の「幼」の右にそれぞれ「幻」（朱）

★上巻36／右2行目／489番歌
☆河の瀬にうつまくみれは
　左に見せ消ち無し、右に「の」（朱）

★上巻36／右3行目／489番歌注
☆かはのせにうすまくをみれは
　左に見せ消ち（朱）、右に「つ」（朱、濁点無し）

★上巻36／右4行目／489番歌注
☆たれたる舟かけそ也
　二文字の中間右に「と」（朱、潰れているので判読困難）
　「也」の左に見せ消ち無し

★上巻36／左1行目／494番歌
☆なるといふなるすゞか山こえて嬉しき
　濁点朱

★上巻38／左3行目／516番歌
☆付はたかゐたかゐたかみに
　「付」に鍵形記号を付け（朱）、「たかゐたかにみ」の右に「大にら」と読める三文字（朱）と繰り返し記号三つ（朱）有り

★上巻39／左5行目／526番歌注
☆我ゝこと はゝ我なとたては也
　「こと」⇧「と」
　「と」の左に見せ消ち（朱）、右に「そ」（朱、濁点無し）

★上巻40／右3行目・4行目／528番詞書
☆一　健守法師
　一　佛名のゝぶしにて
　濁点朱
　〔3・4行目ともに528番歌詞書だが、「健守法師」に対する注を欠く〕

★上巻40／右5行目／528番詞書注

☆僧たちをは皆野ぶしといふ也
濁点朱

★上巻40／左5行目／529番歌注
☆と云心ゝ」と也
左に見せ消ち（朱）

★上巻41／右6行目／532番詞書注
☆経たんする事也ず僧ばうはゞん
「ず」「ば」「ゞ」ともに濁点は朱
「ゞん」の中間右に「伴」（朱）

★上巻45／左5行目／564番歌注
☆又下心はとてもと〳〵より
「よ」⇧「ふ」

★上巻46／左1行目／566番歌
☆絶たる戀の茂き此地
左に見せ消ち（朱）、下に「ころ」（朱）

★上巻46／左6行目／567番歌注
☆時のまぐさにせんなり
濁点朱

★上巻46／左6行目と7行目の間
一行分空白

★上巻47／右3行目／569番歌注
☆さわと云學をうるほふと
右に「字」（朱）

★上巻47／右8行目／569番歌注
☆よしのゝ宮は天地天王の御事
「王」⇧「皇」

★上巻48／左6行目／573番歌注
☆神女神樂なとする女也
「樂」⇧「事」

★上巻48／左6行目（巻九巻末）のあと
二行分空白

★上巻50／右3行目／582番歌注
☆はしみをおびとりにして
濁点朱

★上巻50／左2行目と3行目の間
一行分空白〔585番が歌本文のみ掲出されていて注がない

ので、585番歌注が欠落したものか〕

★上巻52／右1行目／593番歌
☆ねきかへるひるゑのやしろのゆふたすき
「へ」の左に見せ消ち（朱）、右に「く」
「ゑ」の左に見せ消ち（朱）、右に「え」

★上巻52／右2行目／593番歌注
☆いのちかくる也此下句は
左に見せ消ち（朱）、右に「り」（朱）

★上巻53／右4行目／608番歌
☆とゝこほる時もあらしな近江なるおものゝはまのひ
つきは
「ゝ」の左に見せ消ち（朱）、右に「ど」（濁点有り）
「のひ」の間に補入記号（朱）、右に「天つ」（朱）

★上巻53／右5行目／608番歌注
☆とゞこほるときもあらしは
濁点朱

★上巻53／左1行目／609番歌
☆ことしより千年の山はこゑたえす
「え」⇧「ゑ」

★上巻54／右2行目／619番歌注
☆つゝけてたゝ神の
左右に点有り（朱）〔濁音であることをあらわすか〕

★下巻4／右5行目／654番歌注
☆我身にとれそけにも思ひしる程の事
「に」⇧「ひ」
「れ」⇧「つ」
「も思」の中間右に「と」（朱）

★下巻4／右6行目／654番歌注
☆あはれとはおもはめ也
「れ」⇧「ね」

★下巻4／左4行目／657番歌注
☆神もしるらふ程にけふを心を
左に見せ消ち（朱）、右に「は」（朱）

★下巻5／左4行目／664番歌注
☆人とみてよりたのもしもなく
二文字の間に補入記号（朱）、右に「け」（朱）

★下巻5／左8行目／666番歌

☆玉江漕こもかる舟のさしはへて
　左に見せ消ち（朱）、右に「り」（朱、虫損有り）

★下巻6／右1行目／666番歌注
☆さしはへてはさしにさして
　左に見せ消ち（朱）、右に「ら」（朱）

★下巻6／右2行目／666番歌注
☆あらはさしゝにさしてよらふと
　「し」の左に見せ消ち（朱）、右に「ら」（朱）
　「に」⇧「江」

★下巻6／右3行目／668番歌
☆もゝへなる心は思へとたにあはぬかも
　左に見せ消ち（朱）、右に「只」（朱）

★下巻6／右4行目／668番歌注
☆思へとも一向にあはぬと云り
　左に見せ消ち（朱）、右に「る」（朱）

★下巻6／左3行目／671番歌
☆みくつはたれかすませてもらん
　「ら」⇧「み」

★下巻7／右1行目／679番歌
☆かたいさりするみとり子のさはん月にも
　一文字ごとに左に見せ消ち（朱）、右に「たゝ」（朱）

★下巻7／右7行目／680番歌注
☆あはんすると人か云たる程
　「云」⇧「き」

★下巻7／右8行目／680番歌注
☆は月日たに過たらは逢んする
　「月日」⇧「ゐる」

★下巻8／左7行目／705番歌注
☆あるそと云てもえうちみ
　左に見せ消ち（朱）、右に「ら」（朱）

★下巻9／右8行目／719番歌
☆かつらきや我やはくめち橋作り
　「き」⇧「木」
　「ち」の左に見せ消ち（朱）、右に「の」（朱）

★下巻9／左1行目／719番歌注
☆かつらきの神ゝしそめかわるけれは
　右に「こ（カ）」無し

★下巻9／左7行目／730番歌注
☆わか暁をくるかなしき
　左に見せ消ち（朱）、右に「お」（朱）

★下巻10／右1行目／734番歌
☆なきよを
　字に重ねて抹消記号（朱）、左に「に」（朱）

★下巻10／右4行目／734番歌注
☆有物を云也
　二文字の中間の右に「と」（朱）（写真では見えない）

★下巻10／左6行目／743番歌注
☆詞はなき也ふるき哥は皆浮ぬ也
　左に見せ消ち無し、右に「ね」（朱）

★下巻10／左8行目／743番歌注
☆ねてあるよと思たれは案のことく
　左に「△」無し

★下巻11／左1行目／756番歌注
☆なさのみおもひそかならす
　「な」に重ねて抹消記号（朱）
　「みお」の中間の右に「な」（朱）

★下巻11／左3行目／756番歌注
☆する時分をしらねは戀では何か
　濁点朱

★下巻12／右1行目／757番詞書注
☆哥のやうにわてよみたるそ
　二文字の中間の右に「し」
　「て」⇧「歌に」

★下巻14／右6行目／806番歌注
☆やそのちまたとはありうち道
　一文字ごとに左に見せ消ち（朱）、右に「ちこ」（朱）

★下巻14／左8行目／823番歌注
☆ひとなるは身に
　二文字の中間左に挿入記号（朱）、右に「へ」（朱）

★下巻15／右3行目／824番歌
☆かりてほす淀のまこもの雨降はつかね
　二文字の中間の右に「レ」（朱）

★下巻15／右7行目／827番歌

☆人毎
　左に見せ消ち（朱）、右に「こと」（朱、濁点無し）

★下巻15／左1行目／827番歌注
☆何とくぜちはあらんとも
　「く」⇧「て」
　「ぜ」の濁点朱

★下巻16／左6行目／845番歌注
☆成てかるらん
　二文字の中間の右に「ル」（朱）

★下巻17／右7行目／850番歌注
☆に何とすくしたるむかしと也
　二文字の中間の右に「そ」（朱）

★下巻17／左6行目／854番歌注
☆上三句序也心もとけすさて也
　左に見せ消ち（朱）、右に「ま」（朱）

★下巻18／左8行目／862番歌注
☆たゝひさしきをかさねて云たるり也
　「さね」⇧「たら」

★下巻19／右1行目／862番歌注
☆ねきそかねつるは戀の久成て
　二文字の中間に補入記号（〇、朱）、右に「しく」

★下巻19／右7行目／871番歌注
☆いかはやと思と云に生と行とを
　「に」⇧「は」

★下巻20／右2行目／886番歌注
☆たひ人のかやりをほひと
　二文字の中間に補入記号（朱）、右に「か」（朱）

★下巻20／左5行目／888番歌注
☆云心也戀しぬると云し
　左に見せ消ち（朱）、右に「こ」

★下巻21／左5行目／897番歌注
☆たねなと云は物思ふ時する物そと
　「た」⇧「ゝ」

★下巻22／右5行目／911番歌注
☆をくりてこすとも駒さへか心してなけ
　左に見せ消ち（朱、汚れか）、右に「心」（朱）（写真では見えない）

★下巻22／左1行目／916番歌注
☆りたる其人の面影と我と（虫損）
「其」⇧□□（みるカ）

★下巻22／左6行目／918番歌
☆えでいかにせよとかなかめかるらん
濁点朱
「か」⇧「ら」

★下巻23／左1行目／924番歌注
☆てあはしやと思そ罰なとの
左に見せ消ち（朱）、右に「は」

★下巻23／左7行目／928番歌注
☆はなとにしにて又はものをもおもふましき
「しにて」⇧「して」
「をもお」⇧「をお」

★下巻24／左7行目／959番歌注
☆たえてあれはたゝ涙をのこふに
「えて」⇧「ゞかく」
「え」の右に「え」（朱）

★下巻26／右7行目／988番歌注
☆なかすの濱名所也なかすと云わたりて云
左に見せ消ち（朱）、右に「にあ」（朱）

★下巻28／右1行目／1020番歌注
☆尋ぬる也なきにを無名に
左に見せ消ち（朱）、右に「菜」（朱）

★下巻28／右6行目／1025番歌注
☆五つ木によせて一本さへ久きにかすを
左に見せ消ち（朱）、右に「も」（朱）

★下巻28／右7行目／1025番歌注
☆程にさこそあるらんと也
左に見せ消ち（朱）、右に「め」（朱）

★下巻28／左1行目／1026番歌注
☆元輔か年宵たれともかやうなる
「寄」⇧「を老」

★下巻28／左3行目／1026番歌注
☆もありたるかと松にとはんと也
「か」⇧「こ」

★下巻29／右3行目／1030番歌
☆咲し時なをこそみしかもゝの花
「を」⇧「お」

★下巻29／左1行目／1032番歌
☆はかりみでたりや君
濁点朱

★下巻30／右8行目／1038番歌注
☆物うひと思ぬとはあるまし
左に見せ消ち（朱）、右に「ふに」（朱）

★下巻30／左7行目／1048番歌
☆おしまるゝしつめる人のはると思へは
右に「は」（朱）

★下巻31／右3行目／1052番詞書
☆こんくうち侍ける時に
行頭に「一」（詞書中の語句であることを示す）はない

★下巻31／右7行目／1052番歌
☆かのみゆる深山桜はよきて畑たけ
左に見せ消ち（朱）、右に「や」（朱）

※ここ以降、書き込み・濁点は一切朱ではなく、墨となる

★下巻32／左8行目／1077番歌注
☆故に時鳥にことつけをして
左に見せ消ち、右に「郷」

★下巻33／右6行目／1080番歌
☆しはしたに影にかくれぬ時はなを
「を」⇧「お」

★下巻33／右から左にかけて／巻十六巻末から巻十七巻頭
一行分空白無し

★下巻33／左7行目／1086番歌注
☆七夕はたえぬ切にてけふあふ程に
字の上に汚れ（朱）があって、写真ではほとんど読めない

★下巻34／右4行目／1088番詞書
☆一　扇にはかられて侍けるうす物に
左に見せ消ち

★下巻35／右4行目／1101番歌注
☆程に手かふさかりて花を

「手」⇧「年」

★下巻35／右6行目／1103番歌

☆小蝶にも似たる物かな花薄

「小」の左に見せ消ち、右に「こ」

「蝶」の左に見せ消ち、右に「てふ」

★下巻36／左3行目／1120番歌注

☆池のそはのきなり

二文字の中間の右に「く」

★下巻37／右1行目／1121番歌注

☆また昇殿せぬ時の事歟

「歟」⇧「か」

★下巻38／左5行目／1148番詞書注

☆をみは節會也節會の役にあたりたる

「會」⇧「を云」

★下巻39／右2行目／1149番歌注

☆の祭の衣しやう也

左に見せ消ち

★下巻39／左7行目／1163番歌注

☆此石を取まいらせて

二文字の間に補入記号、右に「一」

★下巻40／左4行目／1165番歌注

☆物にて有程也

二文字の間に補入記号、右に「に」

★下巻40／左5行目／1166番歌

☆松うへのかよへる枝をとくらにて

左に見せ消ち無し、右に「か」

★下巻43／右5行目／1200番歌注

☆此悪筆にてはゞからすかきたるは

濁点有り

★下巻43／左8行目から44／右1行目にかけて／巻十八巻末から巻十九巻頭

一行分空白無し

★下巻44／右8行目／1218番歌注

☆山のふもとゝは我あたりの心也

「とゝは」⇧「とは」

★下巻44／左1行目／1218番歌注

☆我あたりによせたるよと云
「よ」（虫損有り）⇧「ぞ」

★下巻44／左4行目／1221番歌注
☆ねぬなはゝ根尊也
左に見せ消ち、右に「尊」

★下巻46／右3行目／1235番詞書注
☆一　賀茂の臨時の使にたちてあしたに　兵衛
注の冒頭の二字が、詞書本文の行に、詞書本文から一字空けて書かれている〔この二字は次行の冒頭にあるべき〕

★下巻47／左1行目／1257番歌
☆い虫損をふへき我身そ
虫損⇧「くよ」

★下巻48／左6から7行目にかけて／巻十九巻末から巻二十巻頭
一行分空白無し

★下巻49／右8行目／1278番歌注
☆花をもひとしほもてはやされ
左に見せ消ち、右に「お」⇧「を」

★下巻50／右1行目／1294番歌注
☆人なしゝは人になし也
「し」⇧「く」

★下巻50／右3行目／1294番歌注
☆云ことはなし人になししといふに
「し」⇧「く」

★下巻50／左1行目／1296番歌注
☆久き也年ふれともい虫損なる人か
虫損⇧「か」

★下巻52／左1行目／1323番歌注
☆たえすねを御なきあらふする
虫損有り

★下巻54／左8行目／1345番歌注
☆たる跡の色そと云りまて虫損
虫損⇧「也」

★下巻55／左5行目／1348番歌注
☆眞如は不變の道理也
「不」⇧「ふ」

★下巻57／右2行目／1351番歌注
☆ありかたきをしれ｜よしと也
「ま」⇧「か」

翻刻補遺覚書

本翻刻補遺は阿波本本文を客観的に正確に読みとることを目指したものだが、これを作り終えて、阿波本の書写あるいは本書の伝来過程の解明に少しでも関与してくるのではないかと思える点を覚書として記しておく。阿波本に至るまでの書写伝来過程を明確に類推できる有力な内部徴証とは言えないのだが、今後の検討の材料としたい。

まず、★上巻50／左2行目と3行目の間に一行分空白があるのは注意される。2行目には585番歌、3行目には586番歌が書かれているので、585番歌は本文のみあって注が欠落していることになる。この空白は、その欠落が親本段階で既にあったことを示しているものと思われる。しかし、言えるのはここまでで、この欠落が親本以前のどの段階で生じたのか、なぜ生じたのかは、杳として知れない。

一行分空白と言えばもう一箇所、[9]★上巻46／左6行目と7行目の間にも注意を要する空白がある。6行目は567番の旋頭歌の注であり、7行目は「一　ちはやふる我おほきみの」というように569番の長歌の一部が引かれており、その次行即ち★上巻47／右1行目からは同歌の注になっている。長歌はこの569番歌と、570番歌をとばして571～573番歌の計四首が取り上げられている[10]のだが、すべて「一　……」という形で歌句の一部（571～573番歌は五音の一句のみ）だけが引かれている。この「一　……」という引用の形は、他では詞書・作者名から引用する際に用いられて（「一」を欠脱している場合も若干ある）おり、今挙げた四箇所に限って、長歌の一句乃至二句を引くのに用いられているのである。そんなことも考慮に入れてここに空白がある意味を考えると、ここから長歌の注に入ることを示しているものだとみてよかろう。よって、ここの空白は、親本の欠落を意味したりするものではないのである。

次に詞書からの引用となっている「一　……」の形の部分で、反対に空白がないので気になる所を見てみよう。

★上巻6／右8行目から同左1行目にかけては、次のようになっていて、左1行目が右8行目に対する注であることを示す形をとっている。ちなみに、同左2行目からは、67番歌引用とその注が続いている。

一　権中納言義懐　　よしちか（右8行目）
　　きたの宮のもゝさの屏風（左1行目）

しかし、右8行目の「権中納言義懐」は54番詞書の一部であり、その注は下の「よしちか」で完結している。人名については、このように引用と同じ行に読みのみを示す例が他にも幾つもあるのである。では左1行目は何かと言うと、これは63番詞書の一部であり、この行は本来「一　きたの宮のもき

の屏風」とあって、次行にその注があった筈なのが、「一」とともに注を欠いているのである。このような形になっていった経緯を、左2行目と左3行目の間に一行分空白がないことも加味して想定すると、最初に63番詞書注が書き漏らされ、次にそれに伴って、あるいは字の擦れもあったのかもしれない、「一」が書き漏らされ、「きたの宮……」が「権中納言義懐」に対する注と誤解されて、あたかも注のように三字程下げて書写されたというような段階を経たものと考えられよう（このような段階を踏むうちに、「き」→「ゝさ」の誤写も生じたか）。いずれにせよ、親本の段階で完備していたのが、阿波本が書写される時に現在の形にいきなり変わったとは考えにくかろう。

さらに、★上巻40／右3行目・4行目は、

一　健守法師

一　佛名のゝぶしにて

となっているが、共に528番詞書の一部からの引用である。[11]ところが、続く5・6行目には仏名の野伏の説明があるだけで、「健守法師」の説明を欠く。585番歌注の例に照らせば、ここの3・4行目の間にも一行分空白があってもよさそうである。しかしこれは、もともとは恐らく「健守法師」の下の部分にその読み方が記されていたのが落ちたのであろう。つまり、先に示した★上巻6／右8行目と同じ形式だったのであろう。この欠脱も、いつの段階で起こったのかはやはり分からない。阿波本書写者の書き漏らしである可能性も充分にあろう。

おわりに

縁があって『拾遺集私抄』の研究を始めた。その手始めとして阿波本にあたって本文を確かめ、佐藤翻刻の補遺を作成したのである。その佐藤翻刻があり、かつ、ウェブ上で全帖の写真が見られるので、かえって誤りが含まれているかもしれない本翻刻補遺を公にするまでもないかとは思ったが、佐藤氏以外には本書に対する本格的研究が皆無である現況を鑑み、本書の存在が学界に再認識されることを願って、敢えて出したものである。ご叱正を切に願う次第である。

さて、佐藤氏の研究は精緻を極めたものと言ってよく、編者や成立時期などに関しても説得力のある推論が展開されている。が、いずれもまだ確定というところまではいっていない。そんな中、当面の目標は、成立時期を明らかにするところに置くのが順序であろう。佐藤氏は中世を主張するが、『和歌大辞典』[12]は項目立ての下に〔江戸期注釈書〕としていて、字数の制約のためもあろう、本文でも根拠は示していない。実は私も江戸期の可能性を捨てきれないと考えており、今後考察を進めていきたい。

成立時期の次には編者を明らかにしたい。佐藤氏は、『拾遺和歌集』から本書に採歌された歌の傾向を見、勅撰和歌集の中核を占める四季歌・恋歌よりも神楽歌をはじめとする

「雑歌的な性格の歌を多く採取している」点に着目、加えて「「釈教歌」的性格の歌」の採歌も目立つこと、あるいは注（2）でも言及した特徴なども加味し、「作者は恐らく宗教方面の仕事にたずさわる神官か僧侶か、あるいはそうしたことに多大の関心を持つ者であろうと思われるのである。」と推測している。もう少し具体的には、兼好と性質を共有するような「二条派の隠遁歌人」・「歌学僧」を編者に比定している。本書の研究は、もう一人の兼好の発掘に繋がるかもしれないのである。

成立時期・作者の究明のためには、「翻刻補遺」でも少し触れた本書の伝来過程の究明も同時に進めなくてはなるまい。本書に対する唯一の本格的研究である佐藤氏の研究成果を多く紹介してきたが、佐藤氏の研究は、本書の成立から阿波本に至るまで、増補や抄出がなされなったことを前提としてなっているようだ。実はそもそもその点が気がかりである。このような注釈書の場合に、この前提に最初から立って果たしてよいものか。勿論、孤本で外部徴証を見いだせない本書の場合、内部徴証から増補・抄出の有無を見極めるのは不可能に近いとも言えるのであるが、それだけに多くの人が研究に参画することが望まれるのである。[12]

【注】

（1）「拾遺集私抄について」（『国語と国文学』第47巻第3号・1970年3月）。後、『中世文学未刊資料の研究』（ひたく書房・1982年2月）「第二部　研究・解説篇　第一章　拾遺集私抄について」に吸収。以下、佐藤氏の説に言及する場合は、すべて同著による。

（2）佐藤氏が指摘する本書の内容の特徴の一部を挙げておく。佐藤氏は、本書の注釈内容が「平易を旨として」、「啓蒙的」「常識的」であることを繰り返し指摘する。そんな中で、「恋歌の部の注釈は、（中略）他の部類の歌に比較すると比較的に長いものが多くみられ」、かつ「恋愛心理の分析を試みている説明までみられて面白い」と言っている。その他、「非科学的な神がかり的な言葉をはっきりと否定し、冷静に注釈を施している」とか、本書の興味深い特徴を佐藤氏は多く指摘しているのである。

（3）その前に阿波本の書誌を確認しておかなければならないが、基本的書誌についても、佐藤氏が詳細に紹介しているので参照されたい。ただ、私が阿波本を実見して、佐藤氏の報告に付け加えておくべきと気づいた点として次の三点がある。即ち、上巻表紙右上に判読できない一文字乃至は二文字（朱）が書かれており、題簽下に「共二」（朱）と書かれていること、下巻の題簽は後のものであること、下巻の裏表紙は剥がれて存在しないことである。

（4）注（1）著の「第一部　本文翻刻篇」に、他五作品の翻刻とともに収録されている。参考までに他五作品を挙

げておく。

家長日記（阿波国文庫旧蔵徳島県立図書館蔵）

土御門内相通親卿記（阿波国文庫旧蔵徳島県立図書館蔵）

遠嶋百首（森敬介旧蔵徳島県立図書館蔵）

下冷泉為豊七十五番恋歌合（阿波国文庫旧蔵佐藤高明蔵）

文亀三年卅六番歌合（阿波国文庫旧蔵徳島県立図書館蔵）

（5）徳島県立図書館のホームページに入り、「所蔵資料紹介」→「デジタルライブラリ阿波国文庫（部分公開）」→「拾遺集私抄」へと進む。

http://www.library.tokushima-ec.ed.jp/digital/monjyo/awadegitalhyouzi.php

（6）注（3）で触れた上巻表紙の朱の文字もウェブ上の写真では見えない。本文中でも、例えば、★下巻20／右2行目の「やり」の右にある「と」（朱）はウェブ上の写真では見えないと思う。ちなみに、徳島県立図書館で写真の現物が閲覧できるが、それではこれらの文字が、うっすらとではあるが、確認できる。

（7）佐藤翻刻の私意による濁点が問題を抱える箇所の一例を、誤読されたと思われる文字も含まれている所から一箇所挙げておく。

★上巻39／左5行目／526番歌注

☆我ゝ[illegible]とは丶我なとたては也

「こと」⇧「と」

「と」の左に見せ消ち（朱）、右に「そ」（朱、濁点無し）

ここを佐藤翻刻は、見せ消ち・傍記に従い、かつ、私意に濁点を付して「我とはゞ、我なぞたてば也」とする（二七頁12行目）。「我問はば、我謎立てば也」とする（実質的には、動詞「問ふ」＝動詞「謎立つ」の指摘）のであろう。しかし、ここは☆の下に示した通りで、即ち「「我（わが）ことは」（526番歌の初句）は、「我（わが）謎立ては」也」の意（実質的には、名詞「こと」＝名詞「謎立て」の指摘）であろう。文字の読みもさることながら、「丶」や「也」の上の「は」に濁点を付して解するのも誤りだと思う。

（8）ここから朱がなくなる理由は勿論分からない。ここより後、★下巻33／左7行目に朱の汚れがあるのも気になる。反対にここより前で墨の書き込みがある所としては、★上巻16／左8行目の「忠」に付された片仮名の読み仮名がある。この字の左には朱で鍵型の印と「志」の傍記もあり、ともども異質である。

（9）他の空白行は、ある巻から次の巻へと移る巻の切れ目にある。ただ、すべての巻の切れ目に空白があるわけではないが、その場合は指摘しておいた。

（10）佐藤氏も『和歌大辞典』（明治書院・1986年3月。『拾遺集私抄』は武井和人氏の担当）も、本書が『拾遺和歌集』から抄出した歌数を三百六十八首とするが、これは歌句全体が引用された短歌・旋頭歌・短連歌を併せた数であり、長歌四首は数えられていない。なお、佐藤氏は

『拾遺集私抄』では、長歌は採歌していない」と言うが、誤り。

(11) これと同様、一首の詞書から二箇所引いている所として、★上巻44／右3行目「一　大隅さくらしまの忠信」、同8行目「一　めしかんかへんとし侍けるとき」があり、共に564番詞書の一部である。ここの場合は、それぞれに対する注が直後に備わっている。

(12) 注(11)参照。

(13) 阿波本を見る限り増補・抄出の痕跡はないと言ってもよいと思うが、増補・抄出の痕跡がないことが増補・痕跡のないことに直ちに繋がるわけではないのは言うまでもない。

【付記】阿波本の閲覧並びに翻刻を許可下さった徳島県立図書館には深く感謝します。